



Title	島崎藤村「鷺の歌」考
Author(s)	片山, 晴夫
Citation	語学文学, 34: 25-31
Issue Date	1996
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8366
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

島崎藤村「鷺の歌」考

片山晴夫

本論においては、島崎藤村の第二詩集『一葉舟』に収められた「鷺の歌」（初出「文学界」五十三号、明30・5）について、次の三点を明らかにすべく考察を試みた。

- ① 「鷺の歌」と「新潮」^{（にひしは）}（『夏草』〈明31・12〉所収）との関係について。
- ② 「鷺の歌」の「老鷺」と「若鷺」について。
- ③ 「鷺の歌」の「闇くらきあらし」及び「浜千鳥」「かもめどり」の意味するもの。

なお、本文は『日本近代文学大系15藤村詩集』（角川書店 昭46・12）所載のものを用い、旧漢字は新字体に改めた。

① 「鷺の歌」と「新潮」の関係について

周知の如く、「鷺の歌」は「老鷺」と「若鷺」の物語、「新潮」は「兄」と「我（弟）」の物語である。季節はともに夏、場所は海辺の景から両作品はともに始まっている。作中において嵐の場面が登場することも共通している。また、両作品ともに後半部において「老鷺」が死んで「若鷺」が生き残り、他方「兄」が嵐の中で死んで「我（弟）」が生き残る点も共通している。さらに、生き残った「若鷺」と「我（弟）」が、新生を目指して今後を生きようとして

いる設定も共通している。

このように共通点の多い「鷺の歌」と「新潮」の関係について、つとに笹淵友一氏が「『新潮』が『鷺の歌』と密接な関係にあるのは言ふまでもない」とし、両作品の「密接な関係」を指摘している（注1）。また、剣持武彦氏も「この詩（『新潮』・引用者注）の着想には『鷺の歌』が関係していると思われる」と述べて、「新潮」の成立に「鷺の歌」が着想の上で関わっていることを指摘している（注2）。三好行雄氏も、「鷺の歌」と「新潮」が、ともに「生の戦いを歌い、労働を讃えて、男性的な中年者の詩境に進む気配を見せている」作品であると述べている（注3）。

笹淵氏、剣持氏、三好氏がそれぞれ説いているように、「鷺の歌」と「新潮」は共通点が多く、製作年代順及び発表順からみて、「鷺の歌」が「新潮」の成立に深く関わっているのは瞭然たるところである。両者を別個の作品とし、両者の関係を絶ってそれぞれ読み解くことは不可能であり、両者に別個のモチーフを想定してかかるのも不自然といふべきであろう。

しかしながら、「鷺の歌」と「新潮」においては、「老鷺」が「兄」、「若鷺」が「我（弟）」にそれぞれ相当し、ストーリーもほぼ同様であるから、二つの作品は「合同」の関係にあると解釈することには疑問がある。このことについては、既に拙稿で述べたことがある（注4）。

従って、「鷺の歌」と「新潮」においては、共通点と別個の問題がそれぞれ存在していると解釈するのが妥当であると思われる。

②「鷺の歌」の「老鷺」と「若鷺」について

「鷺の歌」の「老鷺」と「若鷺」の関係に、北村透谷と島崎藤村のそれを読みとっているのが笹淵友一氏である。笹淵氏は藤村の「北村透谷二七回忌に」などの文章を引きながら、次のように述べている。

透谷は「戦ひの人」であり、その惨憺とした戦ひの跡には拾つても尽きないやうな光つた形見が残つた。彼は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ。そして私達のために、早くもいろいろな支度をして置いて呉れたやうな気がする。人物である。そして「あの友人の後を追つてもつと心の戦を続けて行かう」（「昨日、一昨日」）と藤村に決心させた人物である。この透谷の人間像が老鷺に反映してゐる。そして若鷺には透谷と異なる藤村の個性に対する自覚がある。従つてこの詩（「鷺の歌」・引用者注）は藤村の透谷に対する鎮魂曲と見ることが出来る（注5）。

みられるように、笹淵氏は「鷺の歌」に、透谷と藤村の人間像の「反映」を指摘し、作品が「藤村の透谷に対する鎮魂曲と見ることが出来る。」と述べている。また、剣持氏も、「この詩（「鷺の歌」・引用者注）の観念性は透谷という存在を念頭におくとはいきりす

る。」と述べている（注6）。

笹淵氏、剣持氏がそれぞれ指摘しているような読みとりも可能であるとはいえよう。しかしながら、「鷺の歌」において、「老鷺」と「若鷺」がどのようにイメージ化され、形象化されているのかをここで確かめてみたい。

「若鷺」

翼の骨をそばだてゝすがたをつゝむ若鷺の
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども（第四連）

わが若鷺は琴柱尾や胸に文なす鷗の斑の
承毛は白く柔和に谷の落し羽飛ぶときも
湧きて流るゝ真清水の水に翼をうちひたし
このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅（第七連）

「老鷺」

見よ老鷺はそこ白く赤すぢたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭静かながめけり（第四連）

げに白髪のものゝふの剣の霜を拂ふこと
唐藍の花ますらをのかの青雲を慕ふこと

眼鏡く老鷲は雲の行くへをのぞむかな（第五連）

わか老鷲は肩剛く胸腹広く溢れいで

烈しき風をうち凌ぐ羽は著くもあらはれて

藤の花かも胸の斑の髀に甲をおくごとく

鳥の命の戦ひに翼にかゝる老の霜（第八連）

げにいかめしきものゝ盾にもいづれ翼をば

張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽ばたきて

踴れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく

力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな（第九連）

このように、「若鷲」は、文字通り年若い存在としてのイメージにあふれていることがわかる。それは、「身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども」や、「わが若鷲は琴柱尾や胸に文なす鷗の斑の承毛は白く柔和に」、あるいは「このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅」といった描写から明白であろう。

一方、「老鷲」も文字通り年老いた存在としてのイメージをもっている。「げに白髪のものゝふの剣の霜を拂ふごと」といった描写や、「鳥の命の戦ひに翼にかゝる老の霜」の一節を検すればそのことは明らかであろう。作品中では、「若鷲」と「老鷲」は、もしそれらを人間存在として準えて論ずるとすれば、両者は世代的に離れており、年齢的にも人生経験の上でも相当の差があると解釈する方が自然というべきである。「老鷲」は、明らかに年老けた存在とし

てイメージ化され、形象化されているのである。

このように、作品中に表れている「老鷲」と「若鷲」に、北村透谷と島崎藤村の関係をそのまま「反映」させ、二羽の「鷲」のモデルとして想定していいか。

私見によれば、「老鷲」には北村透谷の生と死のあり方が「反映」してもいいだろうが、それよりも、藤村の父子関係、即ち、「老鷲」と「若鷲」に、島崎正樹と島崎春樹・藤村の関係がより強く「反映」しているとみた方が妥当ではないかと思われる。「老鷲」のイメージを検する限り、かなり世代的には差のある年長の人間を思い浮かべるのは自然な解釈といふべきだろう。藤村と「同時代」を生きた北村透谷の生と死に「老鷲」のイメージを重ねることもできようが、藤村の周囲から「老鷲」の如きイメージを喚起する人物を見出すとすれば、父・正樹の生と死、あるいは正樹の波瀾にみちた激しい一生を思い浮かべることには無理はないであろう。「鷲の歌」は、たとえモデルは誰々であるという視点に立たなくても、新世代と旧世代の生の差異がイメージ化され、形象化された作品である、と読み解くこともできるからである。また同じく「鷲の歌」は、モデル論議をしなくても、「このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅」とある如く、地上・現実の世界に心ひかれていく「若鷲」と、「眼鏡く老鷲は雲の行くへをのぞむかな」とある如く、天空・理想の世界に眼を向けつつ時の流れを覗いている「老鷲」との相違の問題も引き出すことができる。さらに、最終部十五連にあるように、「老鷲」の残した「一羽をくはへ」て大空へ飛び立っていく「若鷲」のイメージからは、世の中における世代交代の様相や、価値観の継

承等といった社会的な主題をもうかがうことができるのである。但し、繰り返すが「老鷺」には何が、あるいは誰れがモデルとなっているか、それを藤村の周囲から捜し出すとすれば、北村透谷とともに、父・正樹を想定してもいいであろう。

問題は十一連である。

たゝかふために生まれは羽を劍の老鷺の
うたなかたんと小休なき熱き胸より吹く氣息は
色くれなるの火炎かもげに悲痛の湧き上り
勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけり

ここに、北村透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明26・2「文学界」二号）の次の一節の影響を見ない人はいないだろう。

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものあるが故に戦ふものなるを。戦ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認め、戦ふなり、筆を以てすると劍を以てすると、戦ふに於ては相異なるどころなし（本文は岩波文庫『北村透谷選集』）

劍持武彦氏も「鷺の歌」の先の一節には「人生に相渉るとは何の謂ぞ」の影響があり、先の透谷の文章がふまえられていると述べている（注7）。故に、北村透谷の思想と生と死が「鷺の歌」の成立にあずかっているのは、紛れもない事実といえよう。

しかし、藤村の父・島崎正樹も幕末維新の変革・動乱の時代を生き、時勢の流れと戦い、その戦いの中で没した人物であるのは瞭然たるところである。うたなかたんと小休なき熱き胸より吹く氣息と、その胸中に「湧き上」ってくる「悲痛」は、北村透谷のものであったと同時に、父・正樹のものでもあったと見ることができるとしてみると、「老鷺」こそは、後の大作『夜明け前』（昭10・10完結）の主人公・青山半蔵の原型であると解釈されるのである。

③「闇きあらし」及び「浜千鳥」「かもめどり」の意味するもの

前節で、「鷺の歌」の「老鷺」が北村透谷と藤村の父・島崎正樹のそれぞれの生と死を「反映」してイメージ化され形象化されたことを論証したのであるが、その「老鷺」を死に至らしめた「闇きあらし」とは何の暗喩であるか。

みるめの草は青くして海の潮の香にはひ
流れ藻の葉はむすぼれて蟹の小舟にこがるゝも
あしたゆふべのさだめなき大龍神の見る夢の
闇きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ

とくたちかへれ夏波に友よびかはす浜千鳥
もしほやく火はきえはて、岩にひそめるかもめどり
蟹は苦やに舟は磯いそうちよする波ぎはの
削りて高き巖角にしばし身をよす二羽の鷺

いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも

寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び

葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の

波のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじや（第一―三連）

言うまでもないことである。「削りて高き巖角にしばし身をよす

二羽の鷺」を襲った「闇きあらし」とは、維新时期から明治の日本社

会を吹き荒れた近代化の激しい嵐の暗喩であり、また、日本社会に

怒濤の如く押し寄せた Western Impact の暗喩であろう。また、

当然のことではあるが、現実社会の中で突如として生ずる急変、予

測の困難なアクシデントの類をも暗喩していよう。

このような「闇きあらし」のイメージは、そっくりそのまま「新

潮」にも登場してきており、その意味については拙稿にて既に論じ

たことがある（注8）。ここで、念のため「新潮」における「闇き

あらし」の場面を確かめておこう。「兄」と「我（弟）」は、漁に出

た夜、突然として嵐に遭遇してしまうこととなるのである。

また、くひまに風吹きて

舞ひ起つ雲をたとふれば

戦に臨むますらをの

あるは鉦うち貝を吹き

あるは太刀佩き剣執り

弓矢を持つに似たりけり

光は離れ星隠れ

みそらの花はちりうせぬ

彩美しき巻物を

高く舒べたる大空は

みるまに暗く覆はれて

目にすさまじく変りけり

聞けばはるかに万軍の

鯨波のひゞきにうちまぜて

陣螺の音色ほがらかに

野の空高く吹けるごと

闇き潮の音のうち

いと新しき声すなり

彼あまた、び海にきて

風吹き起るをり／＼の

波の響に慣れしかど

かゝる清しき音をたてて

奇しき魔の吹く角かとぞ

うたがはるゝは聞かざりき（第二部第一―第四連）

ここにみられる「新潮」の嵐の意味、あるいはその暗喩するも

のを整理すると、ほぼ二点にまとめることができる。一つは、夜の

漁場に居た「兄」と「我（弟）」に突如として襲いかかってくるこ

の嵐は、現実社会に生きる人間たちの生を翻弄するところの、予知の困難な急変ないしはアクシデントの暗喩となっていることである。この種の嵐の襲来にひるむことなく「兄」と「我（弟）」は我が身を守ろうと必死に戦うのであるが、「兄」は不幸にも非業の死を遂げることとなる。また、もう一つ、この嵐が「いと新しき声すなり」というものであり、「清しき音をたてて襲って来たものである、ということには十分に注目しなくてはなるまい。この嵐の「新しき声」、あるいは「清しき音」をたてて「奇しき魔の吹く角かたぞ／うたがはるゝ」、あるいはかつて「聞かざりき」嵐の音とは、まさしく維新时期から明治期にかけて、新しい大勢力として日本社会を襲ってきた Western Impact を暗喩していることは明らかであろう。漁場でその種の嵐に「兄」と「我（弟）」は遭遇するのだが、「兄」は遂に「海の藻屑」（第二部第八連）となってしまうのである。この「新潮」の「兄」の生と死が、北村透谷の実人生のありようを「反映」していることは明らかであろう。またそれは、北村透谷の如き人生をおくった人々、Western Impact の襲来の渦中で非業の、あるいは不幸な死を遂げた多数の人々の暗喩でもあろう。

故に、「鷺の歌」の「闇きあらし」も、「新潮」の嵐と同じく、二つの意味をもった暗喩であり、北村透谷及び島崎正樹の生と死が「老鷺」に「反映」していると解釈するのは、あながち牽強附会とはいえないと思われるのである。

一方、「浜千鳥」「かもめどり」の暗喩するものは明らかであろう。

とくたちかへれ夏波に友よびかはす浜千鳥
もしほやく火はきえはてゝ岩にひそめるかもめどり（第二連）

このように、「浜千鳥」も「かもめどり」も、「闇きあらし」の襲来にはただひたすら我が身を守ろうとするのみなのである。「老鷺」のように戦おうとする姿勢は見られず、また「若鷺」のように、嵐の中で、地上でその戦いをじっと見守るといふ姿も見られない。専ら「闇きあらし」の通り過ぎるのをじっと待っているのが「浜千鳥」であり「かもめどり」なのである。

さすれば「浜千鳥」と「かもめどり」は、「闇きあらし」の数々をかいくぐり、やり過ぎて生きのびる、多数のしたたかな庶民の暗喩であると解釈できる。鷺は単独で行動するのに比べて、「浜千鳥」や「かもめどり」は群をなして行動する、という習性も、この解釈と合致していよう。その意味で、「友よびかはす浜千鳥」という描写は生きていようと思われる。

以上、見てきたように、島崎藤村は「鷺の歌」で維新时期から明治初期にかけての自己と自己の周辺の人々——友人、父——及びその時代の日本社会のありようと、そこに生きた人々の姿を映し出そうと試みたといえよう、そして、そのような藤村が、後年、『破戒』（明39）を刊行し、『夜明け前』を世に出すこととなるのは、蓋し自然ななりゆきであるといふこともできるのではないかと思われる。

(注1) 笹淵氏『「文学界」とその時代下』(昭35・3 明治書院)
一一九ページ。

(注2) 剣持氏 頭注(『日本近代文学大系15 藤村詩集』昭46・12)
三一九ページ。

(注3) 三好氏 解説(へ注2)前掲書) 四〇ページ。

(注4) 「島崎藤村『新潮』論(『日本文学の伝統』へ平5・3
三弥井書店)所収)。

(注5) 笹淵氏 前掲書一〇八九ページ。

(注6) 剣持氏 補注(へ注2)前掲書) 五九一ページ。

(注7) 剣持氏 頭注(へ注2)前掲書) 一九三ページ。

(注8) (注4)に同じ。